

Kenneth Rexroth と日本 (1)

田 口 哲 也

1

Kenneth Rexroth は一般的にはビートの産婆役として知られている。しかし、いまだに彼をビート詩人と思っている人も多し、ブラック・マウンテン派の詩人とビート詩人の区別さえ明確になっていないことも多いようである。かつて Robert Creeley が1970年代の初めに来日した折りに、いい加減に詩人にレッテルを貼るような一般化はやめろと語っていたが、批評にしろ、創作にしろ、確かに個々の書き手を見ていけば、簡単な一般化はできないことがすぐに分かるほど、二〇世紀の書き手は個性的である。しかし、ビートが集団としての活動に新しい意味を見出そうとしたのも事実だし、Charles Olson や Creeley が新しい詩論を展開させようとしたのも否定できない。

ここではビートそのものについて論じるのが目的ではないが、規模こそ大きくはないものの、近年のビート・ブームの再燃、そして、アメリカでのちょっとした Rexroth 再評価の動きを前にして、曖昧なままになっているビートと Rexroth の関係をまず整理しておこうと思う。¹ やや遠回りではあるが、Rexroth と日本の関係を正確に知るためには必要な回り道である。

2

かつてのビートの「反社会性」の看板はとっくの昔に外され、ビートの詩人たちが大学のカリキュラムの中に包摂され、卒業論文のテーマに Allen Ginsberg や Gary Snyder が取り上げられるといった時代になってすでに久しい。例えば Michael McClure と The Doors のキーボード奏者であった Ray

Manzarek との合作によるビデオ、*Love Lion* の宣伝文に転載されている新聞評の書き出しは次のようになっている。

Michael McClure arrived on the scene of American poetry in October 1955 when, at age 23, he was among the handful poets to read at The Six Gallery, a converted auto-repair shop in San Francisco's Marina District.

That night, along with Gary Snyder, Phillip Lamantia, Phillip Whalen, Kenneth Rexroth and Allen Ginsberg, McClure helped usher in the "beat movement"—the last time a group of writers joined together to share a common vision and express the sorrows of a restless generation.²

ごらんのとおり Ginsberg が "Howl" を読んだシックス・ギャラリーでの朗読会がいまなお語り草になっている。その前後にこれといった文学運動がなくて、アメリカ詩が沈滞し続けていたということもあろうが、逆にいうとビートの出発はそれほどまでに衝撃的であったということだ。しかしこのセンセーショナルなデビューによる成功はその後のビート詩人たち自身に重くのしかかってくることになる。朗読会の二年後の1957年、Globe Press が出していた *Evergreen Review* に寄せた過激な公開書簡の中で、Rexroth は早くもビートの商業化への傾斜という、その後現実のものとなる危険を指摘している。「余りにも宣伝されてしまって、アンダーグラウンドな要素は何もなくなってしまっている」という書き出しで始まるこの書簡には、すべての文化現象を商業化し、白人文化の中へと吸収してゆくアメリカの文化の体質をよく知っていた Rexroth ならではの危機意識が強くでてくる。

There has been so much publicity recently about the San Francisco Renaissance and the New Generation of Revolt and Our Underground Literature and Cultural Disaffiliation that I for one am getting a little sick of writing about it, and the writers who are the objects of all the

uproar run the serious danger of falling over, 'dizzy with success,' in the immortal words of Comrade Koba. Certainly there is nothing underground about it anymore.³

Rexrothが注意深くビートということばを避けているところに注目したい。アメリカにおいてはあらゆる方面において、あらゆる分野において、WASPを中心とする一握りの白人層が歴史をつくりあげ、書きあげていったのは周知のとおりであるが、このようなアメリカ社会を構成してゆくメカニズムは遠くからみていると分かりにくい。いやアメリカの内部にいてもそれは見えにくいはずだ。特にケネディーや公民権運動の後にはますます見えにくくなってきている。それはそれぞれの見事に組織された機構を持つ、様々な特権階級の利害が巧みに統合された世界だからだ。強力なビジネスの集団、軍産複合体、保守主義者、大学・学界、文学や音楽や映画のプロデューサーたち、そしてインテリまでがすべてこの巨大な機構の内側にある。リベラルではありえても、けっしてラディカルになることは許されない。一步でもこの機構の外に出てしまったが最後、国外に追放されてしまうか、Wilhelm Reichのように獄中で死ぬことになる。⁴

かつてのアラバマ州の知事 George Corley Wallace などは、流行し始めたロックンロールを排斥しようとした。しかし、皮肉なことに黒人音楽をルーツとするこのロックンロールはやがてアメリカを代表するような巨大な産業の一つとなってゆく。六〇年代のヒッピー運動や対抗文化(Counterculture)も同じように商業化されてゆき、牙を抜かれてゆく。この資本主義による独特の文化支配は何もアメリカに限ったことではないのだが、アメリカの場合は恐らくその歴史性によるのであろうが、この支配構造が余りにも強力な吸引力を持っているために支配構造そのものが見えにくい。アメリカ政府がサッコ・ヴァンゼッティ事件から、民主主義の戦いを強調してアメリカ国民をナチス支配下のドイツ国民に劣らぬまでに単色化することに成功した第二次

大戦中でさえ、良心的兵役拒否を貫き通した経験を持つ Rexroth はこのような支配構造に何度も突きあたっている。⁵ 50年代のサンフランシスコという、緊張感を強いられることが比較的少なかった都市がなければとうにアメリカを去っていただろうと述懐する Rexroth。⁶ それに、最近日本でも知られるようになった Paul Bowles が Rexroth とは違って、とうとうアメリカに留まらずにモロッコに去り、そこに住み着いてしまったことなどは日本人にはいまだに理解しにくい。

現象的には Rexroth はビートの商業化と共にビートから離れていった。だがそのような彼の判断と行動の根拠となった歴史的背景を押さえておかないと、なぜ彼が自分とビートとの関係に否定的であったのかが理解しにくくなる。

3

では Rexroth はどこに向おうとしたのか。紆余曲折を経て彼がたどり着いたのは東洋であり、特に日本文化との出会いは最も重要であった。わたしたちは日本文化が世界に対してもつ重要性について、根本のところでは自信を持っていないようである。これは明治以来の極端な欧化政策による過剰な西欧崇拝にもよるが、第二次大戦の敗北による自信喪失ももう一つの原因になっている。しかし、長年にわたって蓄積された日本文化の高い質は西欧の第一級の知識人・芸術家にとっては無視できないものである。特に、もともと様々な文化を統合するような形でできあがっているアメリカに住む芸術家にとっては、ヨーロッパに背を向け、太平洋の彼方に向かうのは不自然ではなかった。

1967年に Rexroth は初めて日本にやってきて、京都に滞在している。この日本との出会いは Gary Snyder や Cid Corman のように京都に長く滞在して、独特の詩法を完成させていった詩人たちからの影響が大きかったと言える。だが、この時期に Rexroth が突然のように日本に興味を持ち始めたとい

うのではない。日本文学への深い関心は1944年の *The Phoenix and the Tortoise* にすでに認めることができるし、名訳 *One Hundred Poems from the Japanese* の出版は初来日の3年前、1964年のことである。さらに Rexroth の日本への関心は古典文学だけでなく同時代の詩人にも向けられていた。近年、Rexroth とも関係の深い詩人で、日本文学の研究家でもある John Solt 氏の精力的な研究、紹介などによって、アメリカでも再び高い評価を受け始めている北園克衛との長い交友は続いていた。1978年京都「ほんやら洞」での片桐ユズル氏の司会による、白石かずこ氏とのジョイント・リーディングの際、Rexroth は北園克衛が自分の長年の親友であり、彼の優れた詩が今日あまり読まれていないのは、どういう理由があるにしろとても残念なことだと語っていた。

実際に日本にやって来た Rexroth は、古典文学が生きた世界として今なお日本に残っていることに強い感動を覚え、ペンクラブの大会への参加に伴う短期間の滞在の後、丸一年にわたる京都生活を送り、その後も何度かの日本滞在を果たす。そして彼と生の日本との出会いはいくつもの新しい情熱に満ちた詩篇を彼に紡がせることになる。それらの作品は *New Poems* や *The Morning Star* にまとめられていくことになる。また同時に前述の白石かずこ氏を始めとする日本の現代詩人の紹介を精力的に行うことになるが、これは Rexroth のもう一つの大きな業績である。

ここでは日本の古典文学の世界が Rexroth の感性豊かなアンテナによってとらえられ、英語の詩へと変換されていく様を、一篇の詩をモデルにして垣間見てみることにする。

Who was this princess under
 This mound overgrown with trees
 Now almost bare of leaves?
 Only the pine and cypress
 Are still green. Scattered through the

Dusk are orange wild kaki on
 Bare branches. Darkness, an owl
 Answers the temple bell. The
 Sun has passed the crossroads of
 Heaven.

There are more leaves on
 The ground than grew on the trees.
 I can no longer see the
 Path; I find my way without
 Stumbling; my heavy heart has
 Gone this way before. Until
 Life goes out memory will
 Not vanish, but grow stronger
 Night by night.

Aching nostalgia——
 In the darkness every moment
 Grows longer and longer, and
 I feel as timeless as the
 Two thousand year old cypress.⁷

これは1976年に出版された、長短あわせて8つの詩篇からなる *On Flower Wreath Hill* の2番目の叙情詩である。日本の古典文学の世界をいわば本歌取りしつつ、自分の肉体に日本の詩神を宿らせた作品で、後に前述の *The Morning Star* に収められるが、この詩集の方には次のような自注が付せられている。

In 1974-75, we lived in Kyoto in an embayment of Higashiyama, the Eastern Hills, in a seven hundred year old farm house.

The range, which rises directly above the easternmost long street of the city, culminates in Mt. Hiei. It is almost entirely forest and wildlife reserve because scattered all through it are temples and tombs and cemeteries. Our street led up to Yamashina Pass and

across the street from our house a shoulder of the range rose abruptly to a little plateau on which long ago had been built the tumulus of a princess which now is only an irregular heap of low mounds covered with trees. Behind it is the complex of Shingon Temples called Sennuji, which includes a large building in which are stored the ashes of former emperors. The Japanese seldom bury the dead, and the tumulus age was of very short duration at the beginning of Japanese history, although it resulted in immense keyhole shaped mounds, one of them of greater bulk than the Great Pyramid of Gizeh, keyhole shaped and surrounded by a moat. The one mentioned in the poem had been a far more modest structure. Mt. Hiei is the site of the founding temples of Tendai and once, before they were all slaughtered by Nobunaga, contained sixty thousand monks at least. Today there are still many monasteries — but also an amusement park. Kamo River flows close to the edge of the mountains.

The second and third verses of Part II are a conflation of well-known Japanese poems,⁸

長々しい引用となったが、これには理由がある。78年の大阪のアメリカン・センターでの講演と朗読の際に Rexroth に対して聴衆のひとりからこんな質問が出た。「貴方の詩の中には日本の文化や風物について、かなり詳しい表現が出てくるが、アメリカ人の読者にはそれが理解できるのか。」日本人にしか日本がわかるはずがないという意識に裏打ちされた質問であったが、Rexroth は丁寧に注釈を付けるのだと、これまた丁寧に答えていた。さらに、92年に岡山で筆者が Rexroth の詩について語った後に、質問が出た。今、あらっばくその時の質問を要約すると、「何かとこの手の詩人は京都、京都と決まり切った日本のエキゾチックな面を武器にするが…」というものであった。この二つの疑問はわたしたちが今後アメリカの現代詩を考える上で無視できないものであるので、この疑問に対する一つの答えとして、Rexroth の自注を長々と引用させてもらった。即ち、モダニズム以降の詩においては、

いわば「一国文化主義」的な考えは通用しなくなっていて、例えば日本人にしかわからないはずの日本の文化や風物に対して、大いなる興味を持って、またしばしば、平均的な日本人以上の理解を持って接近する「外国人」がいるのである。ただし、Rexrothは単なる異国趣味に取られないように、用心深く自注をつけた。

さて問題の注釈は、同時に、いま論じようとしている作品を直接理解するための鍵にもなっている。かいつまんで言うと、「1974年から75年にかけて京都に住んでいたが、そこは寺院や墓地に近いところで森や自然が残っていた。近くに皇女を埋葬した塚があり、その裏手には真言宗の泉湧寺があった。パートIIの二番目と三番目の詩行は、日本の有名な詩歌を融合させたものである。」ということになるだろうか。ついでに“Flower Wreath Hill”つまり「花環の丘」は日本や中国では墓地の婉曲表現である、という注が先ほどの引用の後に付せられている。

4

詩人・批評家で、アメリカでも日本でもしばしばRexrothと朗読旅行を共にした、Rexrothの最もよき理解者の一人であるMorgan Gibsonは、近年上梓された氏の研究書*Revolutionary Rexroth*の中で、この作品は詩人が自らの死を意識したものであると論じている。⁹

ただ、花環の丘があくまでも日本や中国における墓地の婉曲表現であると、詩人自身が注を付している点に注意を払っておきたい。70歳になったRexrothは、“the/Sun has passed the crossroads of/Heaven.”とあるように、確かに死を意識はしていたであろう。しかしそれは死へのオブセッションではない。T. S. Eliotを始めとする西欧の詩人たち、特にキリスト教詩人にとって、死と復活は第一義的なテーマでありえた。が、ここにみえる死はそのようなヒステリックなものではない。共同体が粉々に破壊されたあとの近代の文化の中で、生身の人間が無機的な個へと還元され、たった一人で死と復活とい

うような重すぎる課題に向かい合わなければならないような宿命、いや宿痾からようやく逃れえた、この詩人の死者との交感こそがこの作品のテーマであると筆者は考える。

このテーマを浮き上がらせるために、敢えて試訳を掲げてみたい。

いまやほとんど葉を落とした
 木々におおわれた塚の下に眠る
 この皇女はだれだったのだろう
 ただ松と杉
 だけがいまも緑だ 薄闇のなかに広がる
 朱色の野生の柿が
 葉を落とした枝に実っている 闇のなか 一羽の梟が
 寺の鐘の音に応える 陽は
 天の交差路を過ぎた

地面には木々に生えた以上の
 葉が落ちていて
 わたしにはもはや道が
 見えないけれど つまづかずに
 歩いてゆける わたしのおもいころが
 この道をすでに通ったのだから いのち
 が消えるまで記憶が消える
 ことはない いや記憶は夜毎
 強くなる

心を苦しめる郷愁——

闇のなかで瞬間、瞬間が
 だんだんとながくなってゆき そして
 わたしは二千年の杉の古木のように

時間から自由になる

名も知らぬ皇女 (“Who was this princess”) のさびれた塚と常緑樹との対比、それに葉を落としたあとの枝に生々しく実る柿は、死との対比というよりは、むしろ力強い生命の再生を象徴しているように読める。松や杉の緑と柿の実の鮮かな朱は、まるで屏風に描かれた日本画のように薄闇の中で輝く。なるほど忍び寄る闇や、梟の鳴き声や、寺の鐘の音は無常を感じさせるが、後半の詩行のベースとなっている歌のテーマは秘められた恋の情熱であり、この作品の中では滅びゆく肉体と持続する精神の和解を暗示している。確かに木々に残っている葉より、地面に落ちた葉の数の方が多いのであるが、詩人はすでに見えなくなった小道を躓くことなく歩くことができる。しかも、死を前にして記憶はますます鮮かになっていく。“Night by night”という表現はエロティックでさえある。そして二千年の杉と同じように無時間性を詩人が獲得するところで詩は結ばれる。これは詩人が個へと分解された近代の人間の中に宿る狂気を捨て去り、自然の生命の中へと同化しえた喜びの表現としてとらえるべきであろう。

早くから Rexroth に注目し、精力的な紹介と研究を行ってきた兎玉実英氏は *American Poetry and Japanese Culture* の Rexroth の章でこの作品の素材となった四つの歌の詩人自身による英訳を掲げて、本歌取りを解説している。

In the dusk the path
 You used to come to me
 Is overgrown and indistinguishable,
 Except for the spider webs
 That hang across it
 Like threads of sorrow.
 Izumi Shikibu
 Evening darkens until

I can no longer see the path.
 Still I find my way home.
 My horse has gone this way before.

Anonymous

Until life goes out
 Memory will not vanish
 But grow stronger
 Day by day.

Anonymous

Aching nostalgia—
 As evening darkens
 And every moment grows
 Longer and longer, I feel
 Ageless as the thousand year pine.

Anonymous¹⁰

ベースとなった本歌の英訳が Rexroth 自身の手によるものであるせいもあるが、Eilott の合成詩とは違って、注釈がなければごく少数のジャパノロジストを除けば Rexroth の本歌取りに気が付く者はほとんどいないはずである。この作品では、詩人自身の声をはっきりと読者の心の耳に届いてくる。塚の下に眠る皇女の正体への好奇心に始まり、太古の杉と同化して終わる最後まで詩人がまるで目の前の読者に語りかけるかのような直接性をもっているからである。いい古された、自然との合一や無時間性の獲得など、観念の世界では空しいだけである。実際に夕暮れの森の中という場において日本の伝統詩の精神の中に深く入り込み、自己を無にすることによってすべての風景を感覚していく、解放された精神の喜びが、直接性を失わない、詩人の生の声を通して表現されているところにこの作品の意味がある。

とは言っても、Rexroth に対する熱狂的な反応を今の時代に期待するのは難しい。Brancusi の彫像に象徴されるような抽象性が今世紀の科学と芸術をリードしてきたし、今もなおリードし続けているからである。主に言語によ

る、感覚される世界の否定と拒否は、具象への感性を鈍化させ、パリのマラルメや、もっと時代が下ると、サンフランシスコの Jack Spicer のような狂気の天才を生んだ。わたしたちもまたこの狂気から自由ではない。しかし、Rexroth が歩んだ軌跡に大日如来のような光明が見えるのはなぜなのか。次回ではこの隠れた巨人が歩み入った詩宇宙の入口に踏み込んでみるつもりである。

注

*本稿は中・四国アメリカ文学会第二一回大会（1992年6月21日、於岡山カルチャー・ホテル）でのシンポジウム「アメリカ現代詩の流れ——二〇世紀中葉の転換——」に於て発表したものの一部に基づいている。

- 1 New Directions から Linda Hamalian の編による Rexroth の *An Autobiographical Novel* が、また、後期の作品を集めた、*Flower Wreath Hill: Later Poems* がそれぞれ1991年に出版された。前者は増補版である。また同年には Linda Hamalian の詳細な伝記、*A Life of Kenneth Rexroth* が Norton から、また Lee Bartlett 編の *Kenneth Rexroth and James Laughlin: Selected Letters* が、やはり Norton から出ている。前者は不正確で不当な記述が多いが、後者は詳細な注が付された、貴重な研究資料になっている。また1990年には Ken Knabb の Rexroth へのオマージュとでもいうべき、*The Relevance of Rexroth* が Bureau of Public Secrets より出版されている。
- 2 *Love Lion* はニューヨークの Mystic Fire Video 社 (P. O. Box 9323, Dept. LL, S. Burlington, VT 05407 USA) からリリースされた。
- 3 “San Francisco Letter,” *Evergreen Review*, 1957, Vol. 1, No. 2, 5.
- 4 ウィーンでフロイトの助手として働いたあと、Reich はデンマーク、スエーデン、ノルウェーを転々として、1939年にはアメリカに渡る。そしてマッカーシー旋風の吹き荒れる50年代、性についての自説を曲げなかったために FDA (Food and Drug Administration) すなわち連邦食品薬品局の圧迫を受ける。1956年、ついに法廷侮辱罪と食品および薬品に関する法律 (Food and Drug Act) 違反で懲役2年の判決を受ける。ペンシルバニア州のルイズバーグの連邦刑務所で服役するが、8ヶ月後の1957年11月、心臓発作のため獄死する。ちなみに『英米法辞典』（東京大学出版会）によると、FDA とは「国民を有害な食品、薬品から守ることなどを任務とする」とある。30年とちょっと前の話である。Cf. Gay Talese, *Thy Neighbour's Wife* (London: Pan Books, 1981), pp.169-74.

- 5 Gary Snyder や Allen Ginsberg への Rexroth の否定的な評価が意味するところはなかなか正確に読み取られていない。例えば1974年の段階であるが、徳永暢三氏は次のように書いている。

レックスロス氏のいわばアメリカ詩概観は、かなり partisan 的な、ジャーナリスト的なものである。一切が巨大なコマーシャリズム、「若者崇拜」、新しさへの倦むことなき追求に明け暮れるアメリカ社会、「運動」と「運動」との間に連続性が皆無としか思えないアメリカ文学の Americanness,そして here and now 尊重のアメリカ版実存主義——そうした風土では、ビート詩人という“Establishment”に対するレックスロス氏の批判もまた、間接的には「僕自身のための広告」となり、partisan 的とならざるを得ない状況というものを、私は痛感するのである。——『アメリカ現代詩と無』(英潮社, 1990年), p.177.

このような「印象」が一体どこから形成されるのかは次回にゆっくり論じるとして、敢えて筆者と対照的な立場の発言を紹介しておいた。

- 6 “I for one can say flatly that if I couldn’ t live here (i. e. San Francisco) I would leave the United States for someplace like Aix en Provence—so fast!”
Evergreen Review, 1957, Vol. 1, No. 2, 6.
- 7 *The Morning Star* (New York: New Directions, 1979), p.36.
- 8 *The Morning Star*, p.83.
- 9 Morgan Gibson, *Revolutionary Rexroth: Poet of East-West Wisdom* (Hamden, Connecticut; Archon Books, 1986), pp.82-83.
- 10 Sanehide Kodama, *American Poetry and Japanese Culture* (Hamden, Connecticut; Archon Books 1984), pp.150-53.

Synopsis**Kenneth Rexroth and Japan (1)**

Tetsuya Taguchi

While Kenneth Rexroth has often been referred to as a midwife to the birth of the “beat movement,” it is hardly understood why he had been negative to the now established “Beat poets.” To comprehend this seemingly contradictory story, first we must remember how the American capitalist establishment has absorbed a series of anti-establishment movements and revolutionary cultural phenomena, changing them into newly established government policies and new pieces of the mosaic cultural mainstream. The whole process of this transformation is amazingly magical, hard to recognize, but Rexroth, who kept himself a conscientious objector during World War II when the majority of American citizens were forced to be united against “the Fascist War,” must have known this tricky nature and structure of American capitalism. For him the failure of the Beats looked like another example of victimization.

As Rexroth came to realize there would be no possible way to revive a significant cultural or literary spark if writers should solely depend on national traditions, it was quite natural that he began to be attracted toward Oriental culture. Especially Japanese culture had a strong impact on his literary career. He visited Japan for the first time in 1967 and he stayed in Kyoto in 1974-75. This living experience, along with his wide knowledge and deep understanding of Japanese classic literature, produced a number of philosophical poems, which were to be collected in *On Flower Wreath Hill*.

In this paper I discuss the second verse of this extraordinary poem sequences, analyzing it fully so that Rexroth’s unique poetical world can

be illustrated. Here the poet is free from the doomed Western binary thinking as well as from the locked Christian dualism of life and death, sin and salvation. Rexroth had achieved a new poetic tradition where the union of time and timelessness is made possible, as in the work of great modern poets such as T. S. Eliot, Ezra Pound, William Carlos Williams, and Wallace Stevens. How it was achieved and how his case is different from other cases will be discussed in my next paper.